

# 西尾実国語教育論の探究

——島木赤彦（久保田俊彦）の教育論との関係から——（その1）

桑 原 隆

## I はじめに

### (1) 生活と文化の有機的統合への志向

国語教育の理論および実践の枠組は、大局的観点からすれば、言語生活と言語文化とを一体的関連構造においてとらえていくところにある。言語生活と言語文化とを、各論的にそれぞれの次元において、個別的にその状況や構造を分析し体系的に把握していくことも必要であるが、その前提として常にその両者を一体的に、巨視的にとらえていくことも忘れてはならないであろう。

微視的な視点と巨視的な視点に分けた場合、往々にして後者の巨視的な視点は見失われがちである。例えば、ある一つの文学作品を教材化して授業を展開する場合、徹底的にその教材を分析的に研究し、そして微に入り細に入り丹念に分析的な指導を展開する。このような指導ももちろん重要でかつ必要であることは論を待たずでもないが、その作品や教材の全体像を見失ってしまうような指導に陥らないようにしなければならない。教材の内部への微視的分析は鋭く緻密であっても、その教材の全体的で巨視的な把握や、教材の相

対的位置づけ、さらには教材相互の関係などになると十分ではなかったりする場合も少なくない。このように一つの教材の場合でも、微視的な見方と同時に巨視的な見方が必要であるのと同様に、国語教育の個々の領域を包み込む全体的で巨視的な視点や視野をもつことを常に心がけていかなければならない。そこにその枠組として、生活と文化、言語生活と言語文化を一体的関連構造においてとらえていく方向が考えられる。

歴史的にみた場合、この問題に対してとくに多大な業績を残したのが西尾実である。筆者の課題は、西尾実の国語教育論の成立過程を究明しつつ、生活と文化の統合の問題を中心に再検討していくところにある。本小稿もその一環で、西尾の国語教育観、あるいは「言語生活主義」とも呼ばれている西尾理論の成立と島木赤彦の教育論や教育活動との関係を究明しようとするものである。

島木赤彦は一般にはアララギ派歌人としてその名を知られているけれども、本稿では歌人としてではなく、教育者としての赤彦に視点をあて、そこから西尾にとっての赤彦を問題にしていきたい。なお、教育者としての島木赤彦を問題にする場合には、本名の久保田

俊彦と呼ぶべきであろうが、本稿では「島木赤彦」の雅号を使っていくことにする。

(2) 西尾・島木の略年譜にみる特徴

注(2)は二人の青年時代を中心に、相関的に整理した略年譜である。島木は明治九年、西尾は明治二二年に、ともに長野県の南部、南信州に生まれる。時代的には、わが国の教育制度がほしいに確立され発展していった時期にあたる。寺子屋の時代が終わり、近代学校教育制度が確立されていった時代に生まれ、その新教育制度の学校教育を受けて育った。また、言文一致がしだいに浸透していった時代に青少年期をおくり、文学界の新しい流れの影響も受けていった。

島木の父親は明治維新後小学校の教員をつとめ、西尾の父親は農業に従事していたようであるが、祖父および曾祖父は手習い師匠をつとめていたことである。したがって、島木も西尾も文化的、教育的な家庭環境で育ったとみることができよう。このことは、二人の教育観や教育思想に影響を与えていったように思われる。すなわち、一方では前近代的な、あるいは寺子屋的な生き方や考え方を内包し、それらを全面的に否定するのではなくして内に持ちつつ、新しい近代的な生き方や考え方を取り入れていったのである。共通して言えることは、近代の合理主義的生き方や考え方に對しては、それを迎え入れたというよりも、むしろ否定的であったことである。

島木は西尾より一三歳年輩になるが、その一三年間をへだてつつ、二人は似たような道を歩いている。高等小学校卒業後、一五歳でともに小学校の代用教員をつとめている。それぞれ数年間代用教

員をした後、明治二七年および三九年に長野師範学校に入学しているのである。現代では一五歳でかりに代用教員であっても教壇に立つことはありえないわけであるが、二人のこのような履歴は当時の立身出世の代表的な道であったのであろう。

西尾が長野師範学校に入学した時に、島木との出会いが始まった。すなわち、大池蚤雄、五味義武、金原省吾などと同級生になりその金原省吾からたびたび赤彦のことを聞かされることになったのである。金原省吾は長野師範学校入学以前に、島木が明治三三年から玉川尋常高等小学校に勤務している折、その高等科に在籍し若き赤彦の教育を受け、強烈な印象を受けてきたのである。<sup>(3)</sup>西尾は当時の状況を回想して次のように語っている。

○：師範在学当時、諏訪出身の友人たちは、すでに哲学に関し文学に関し科学に関して、何か一言をもっていた。別けても、島木赤彦先生に補習科で指導されてきた河西(金原)省吾などは、当時すでに、一種の卓見を吐いて、人を驚かすところがあった。下伊那の、しかも南の山里で教育を受けていたわたくしは、驚くことばかりであった。<sup>(4)</sup>…

○当時赤彦は、菊沢に住み、その宿を合歓庵と称し、毎週土曜の夜、青年教育者の有志を集めて、教育を論じ、文化を語った。金原省吾(旧性河西)は、その時高等科に在籍し、赤彦の人間の教育を受け、かつ作歌の門人となった。私が師範在学中、金原から聴かされた赤彦の教育は、実に目新しく耳新しい数々であった。<sup>(5)</sup>

恐らく赤彦は、型破りの個性豊かな青年教師であったに違いない。「教育を論じ、文化を語り」、さらには野球の練習に大変熱心で、そのために時に授業を午前で打ち切り、午睡を生徒にさせたあ

と野球の練習に打ち込ませたともいわれている。このような教育を金原は目の当たりに見、それを同級生の西尾などにさかんに語ったものと思われる。

師範学校卒業後、島木も西尾も小学校の教員をつとめ、島木は三九歳の時上京し歌作に専念しアララギの編集に従事する。西尾は二四歳の時東京帝国大学に選科生として入学する。歌作の道と学問の道と多少の違いはあるけれども、ともに内に秘めた旺盛な意欲や情熱には共通するものを感じさせる。

その後、淑徳高等女学校では、期間は長くないけれども、机を並べて勤務をしている。明治四二年には雑誌『信濃教育』の編集主任に島木が就任し、大正一一年からは西尾が編集主任になっている。このように、二人の略歴においてかなり類似した側面を見出すことができる。一三年先輩の島木は、西尾にとってかなり身近な存在であったようである。西尾は島木に全幅の信頼をよせたわけでは必ずしもなく、赤彦の生き方や考え方に大いに同調したわけでは必ずしもないけれども、直接間接少なからず影響を受けていったことは確かであろう。

## II 教育者としての島木赤彦

西尾が島木からどのような影響を、直接間接、受けていったのか、あるいは、西尾は島木に対してどのように考えていたか、といったことを検討する前に、本章ではまず島木の個人的な教育活動や教育論を検討しておきたい。

島木赤彦の教育観や革新的とも言うていいような教育活動は、明治三一年三月師範学校を卒業して池田町会染尋常高等小学校の訓導

になってから、大正三年に諏訪郡視学を退職して歌作に専念するために上京するまでの約一五年間の教育活動およびその間の論文や職員誌等の記録に集約的にあらわれている。赤彦が二三歳から三九歳までの時期である。『信濃教育』には五〇余編の教育関係の論文を寄せているが、その多くは大正三年以降に書かれたものである。しかし、大正三年以前に青年教師として活動していた時の論文や記録の方にむしろ赤彦の情熱的で斬新な教育論や教育活動を見ることが出来る。また、その主張や教育活動には現代においても傾聴に値するものをもっているように思われる。

以下、筆者から見た赤彦の教育論や教育活動を三つの観点から整理し検討してみたい。

### (1) 赤彦の個性と個性尊重の教育

幼少年時代の赤彦(当時は塚原俊彦)は、かなりの腕白小僧、いたずら小僧で、ほとんどの教師が赤彦には手を焼いたようである。時には、「教師の机の中に蛸蛸を入れておくと云ったような田舎むき出しのわるさ」(蛸蛸・おたまじゃくし)もしたようである。またその一方で純真で涙もろいところもあった。そして、その自然のままの純粋な個性が教育者としての島木赤彦、歌人としての赤彦を支えてきたといってもよいであろう。『信濃教育』の追悼号に寄せた守屋喜七の次の一節は、教育者としての赤彦をよく描き出している。

……学校生活に於ける玉川時代や、上諏訪で岩垂校長を輔けた時代など、学校職員何れもが君の真率で開け放しの点に服して、心の底から君を中心に為事を楽む風が見へた。子供に向っても、さうであった。教壇に立って君は急に態度をかへたり、四角張った



気ナク淡白ニシテ意外ニ活発ナル遊戯ヲ好ミ教師ニ意見ヲ加ヘラ  
ル、トキハ真ニ困入りタル面ヲナス如キハソノ美点ナル可ク成長  
シテ思案ノ出ズルアラバ相応ノ成功ヲ見ルニ至ランカ<sup>(9)</sup>

教師論という立場から考える時、生徒にとって魅力ある教師の側  
の個性も大切であることはすでにのべたけれども、個性というもの  
の本質からいって、教師の資質として個性の実質を一般化すること  
は困難でもある。むしろ教師論として、教師の資質として、求める  
べきことは、児童ひとりひとりの個性を見る目をもち、それをいか  
に伸長していけるかというような資質であろう。この点からみて  
も、赤彦が書いた生徒経歴簿には見るべきものがあるように思われ  
るのである。赤彦の目は、児童の側にある。そして児童ひとりひと  
りの小さな個性、時には頭から抑圧してしまいそうな感情的な露見  
に対しても、こまやかな配慮をし、長い目で見守っていくこととして  
いる。赤彦は当時二四歳前後の若き教師であるにもかかわらず、す  
でに人間としての幅の広さ、度量の大きさをうかがわせている。

本節で最後に言及しておきたいことは、島木の個性観である。赤  
彦自身が自然のままの純真な個性に生きたのと同様に、児童に対し  
ても純真で無邪気な個性を大切にしたい。赤彦の言葉を借りていえ  
ば、「動物性」である。この生まれつきの本能的な動物性を矯正助  
長していくところに人間性は形成されていくものであって、子供が  
時折不す無目的で無意識的な興奮、恐怖、喜悅、悲哀などを頭から  
抑圧してはならないことを強調している。本能的な動物的な個性を  
尊重し、それを長い目で見守り矯正助長していくこと、これが島木  
自身が教育者としても歌人としても生きてきた道であると同時に、  
島木の教育理念および教育実践の原点とみてよいであろう。

## (2) 教育の刷新

赤彦は新卒の教師時代から、教育の刷新に意欲的であった。さま  
ざまな斬新な教育活動や提唱を行った。(1)でみてきた個尊性重の教  
育や生徒経歴簿もその一つであるが、教師の修養ということに対し  
てもかなり力を入れていた。生徒経歴簿を丹念に記載していったの  
と同じ頃、すなわち新卒の二年目に、校内誌の『小天地』に「我  
校ヲ論ジテ同人諸士ニ訴フ」と題して、青年教師としてかなり思い  
切った主張をのべている。次のように箇条書きから始まるもので、  
これは島木の教師論ともみることができよう。

短所ノ暴露ト進歩

我校ニ対スル研究ヲ起セ

主張ナキ親密ト腐敗

研究心

五時間ノ授業ト疑問

職員会ノ寂寥

社会ニ対スル交際

学校ノ威厳

殊ニ校長ニ望ム

生徒ニ対シテ

絶対的威厳ト真正ナル従順親密

一時的従順ト「意気地ナシ」

未来ノ希望ヨリ生ミ来ル活動ト現在の活動、即チ卒業後ニ生クル

教育ト、在学中文ケノ教育

盛大ナル野球ハ学校ノ外観ヲ銜フ為メニ非ズ 以上

一番最後に野球のことについても言及しているところが面白い。

赤彦は野球に相当熱心だったようである。このように箇条書きにのべたあと順次島木の主張を加えているのであるが、「短所ノ暴露ト進歩」や「職員会ノ寂寥」のところの主張には、教育界の慣れ合い的な虚飾にみちた空気を刷新しようとする赤彦らしい若いエネルギーがあふれている。またそこに、島木の根源的な人間性をもみることが出来る。

○：自己ノ短所ハ自己の短所ニテ詮方ナケレバ、只遠慮ナク他ノ「前」ニヒロゲテ、速カニコレガ改善ノ策ヲ講ズ可キノミ。今日教育者ノ猥リニ形容ノ美ヲ逐ヒテ、虚偽遼々タエテ進歩ノ実ヲ示サザルモノ、全クコノ胸襟ノ狭隘ニシテ、度量ノ豆小ナルニ坐セズンバ非ズ。短所ヲ暴露セヨ。暴露セヨ。……

○：職員会ノ議論ハ、何ゾコレ（授業や学校の中で出てくるさまざまな疑問）ニ対シテ寂々寥々タルヤ。将又教師間相互ノ談話ハ何ゾコレニ対シテ、単純ニシテ一律ナルヤ。借問ス。吾人ハ現今日々児童ノ實際ニ向ッテ教授上、訓練上、幾何ノ研究ヲナシ、幾何ノ疑問ヲ有シ、将又幾何ノ抱負ヲ有シツアルカ。議論アル可シ。議論アルベシ。……（<sup>11</sup>）内引用者の補注

「短所ヲ暴露セヨ。暴露セヨ。」「議論アル可シ。議論アルベシ。」と二度繰り返しているのも赤彦らしい。短所を隠さずあげ広げて議論し、語り合う、これはまさに赤彦の生き方そのものであった。またそれが教育を刷新していく道であり、教師の修養の道であると考えたのであった。そして、「職員室ハ常ニ知識思想人格修養ノ道場タランヲ望ム……：斯様ノ種類ノ自由ナル談話ガ職員室ニ常ニ交換セラレンヲ望ム 議論ニハ一切遠慮ナカランヲ望ム」<sup>(12)</sup>と、先に引用した論稿とは別のところでものべており、職員室が教師の修養の道場

となるべきことを強調している。

実際、島木はさかんに語り合い、議論をし、職員会や職員室を刷新していく、さらにそれは学校内だけでなく村や地域社会にも発展していった。玉川小学校の訓導時代には、宿直室を「合歓庵」と称し、そこで文学や教育の問題を語り合い、広丘小学校に校長として単身赴任した時には、「牛屋」<sup>(13)</sup>と呼ばれた下宿は、「あたかも文学サロンの観を呈していた」ともいわれている。玉川小学校の校長になった時には、水曜会というのをつくり、そこで校長が教育の考えを説いたり、論語の輪講会を開いたりしたことが語り継がれている。

「合歓庵」や「牛屋」は赤彦の私熟のようなものであったかもしれない。現代風にいえばサロンであろうが、そのようなサロンにおいて、裸になって語り合い、議論し合う中から若い教育者のみならず、アララギ派の歌人が育てられていったのである。

また、広丘小学校では児童の自治的な組織として「奨善会」をつくっている。その奨善会の心得の第一条に「我等の眼は常に輝き、我等の耳は常に聴く、我等の口は用なき時常に閉つべし」<sup>(14)</sup>と掲げられている。この第一条と、議論あるべしとする赤彦の考えとは矛盾するものではなく、両者を一体的にとらえるところに島木赤彦の言語観、あるいは表現論を見出し出していくことができるであろう。

赤彦の考えを格言風にもれば次のようになるうか。

——短所を暴露し 議論あるべし ただし用なき時口は常に閉ずべし——

(3) 作文教育における新生面の開拓——「写生」の導入  
実践家としての島木赤彦において、歴史的に位置づけられておくべき実践の一つは、写生を取り入れた実践である。この実践は歌人

としての赤彦と切り離しては考えることができないであろうし、その背景には明治二〇年代、三〇年代の文学界の動向、文学思潮の流れが大きく影響を与えていることは改めてここで言及するまでもないであろう。

彼は青年教師時代にはすでに文学への旺盛な興味関心を示し、歌も投稿していた。のちに教育界を離れて歌の道に専念することになったけれども、「教員は歌を作るなら、教育をしつかりやった上で歌を作れ」、「教育をおろそかにしての作歌をしてもおびない。教育に力を入れ、それができたならば必ず歌の方に向ってくる」ということを後輩の若い教師達に語っていたそうである。教育も歌作も、教育道であり歌道であり、島木は根源的に「道」としてとらえていたとみてよいであろう。写生についても同様であり、一心集中の「写生道」であった。写生は方法的手段でもあったろうが、のちに内的生命の表現ともいっているように、単なる技術的手段をこえた人間としての「道」であったとみなしてよいのではなからうか。

島木がその写生を教育に取り入れたのは、明治三五年頃である。「児童自由画展覧会について」（大正八年）の論稿で次のように回想している。

自然から受けた感受をそのまま描かせるといふ趣旨は、博大にして深い芸術の根底に根ざしているものであって予に何等の異存がない。……予は明治三五年の頃諏訪郡玉川小学校に於て図画及び作文の教授に写生画及び写生文の必要を感じて児童に之を試みたことがある。考へも方法も杜撰であつたため、成績を収めることは出来なかつたが、児童に発表の興味を起させるに於て、写生が大なる力を有することは予の経験し得た所である。<sup>(16)</sup>

明治三六年五月には、「図画教授を改良すべし」<sup>(16)</sup>として、臨本模写に終始している図画科を批判している。図と画の重要性を説きつつ、実物正写を取り入れるべきことを主張し、その目的について「実物の正写と審美心の養成とであるが是れわ換言すれば思想の自由発表と云ふ事になる」とものべている。この主張は、直接には「図画科」について言及したものであるけれども、作文についても同様な考えをすでに持っており実践を始めていた。実践の方法としては、それほど深まったものではなかったと思われるが、「思想の自由発表」とのべていることには歴史的に注目しておいてよいであろう。範文模倣一辺倒の作文教育を打破し、書き手の側へしだいに視点が移り、自己表現というものが重要視されていく歴史的な流れが明治三〇年代中頃から始まっていることを示しているものである。

明治の末年になると、少なくとも赤彦の周囲にはかなり写生による作文指導が広まってきたいき、彼自身も自信を高めていったように思っている。例えば、明治四五年の「職員会案等覚え書き」には、綴方について次のように記録されている。

#### 一 写生を本体とす。

書く事は見る事を思惟し観察力を養う為の写生を主とす

#### 二 指導すべき点

1 描写すべきものを特質を見出すこと。つかまへること。

2 見出したるものつかまへたものを正確に描写すること。<sup>(17)</sup>

写生による作文指導にあつて、島木は自ら写生文を書いて児童に示したりもしたようである。実際にどのように指導したのかは十分な記録もなくその詳細を検討することはできないけれども、次の資料からはその一端をうかがうことができる。

…高等二年の生徒を、四賀の学校の校庭の東すみにあった小さな池のしだれ柳のところへ連れていって、生徒に「このしだれ柳を見る、風が吹きやあどうだ」「木はどうだ、よくよくしているな。」「もし、枝があんなに垂れて、風のためにしなししなけりやああの木は折れちまうぞ。」「ここんとはむしが喰っているな。」「小野道風のかわすがとび上った話もこんな所かな。」「——と言っていくと、子どもが綴り方をしたくてしたくてたまらなから非常に生きた綴り方ができました。「細川、綴り方なんちゅうものは、腰かけて、何の題で書けなんていっても駄目だ。こんなように観察させ、頭の中に観察したいものがいっぱいあると、ちやうど水が堤の土手中いっぱいで、土手を破って水があふれ出るように頭の中から出てくるような作文を作らせなけりや作文にはならねえぞ」ということを赤彦先生に教わり、それから私の綴り方も一歩前進したようなわけです<sup>(18)</sup>。

赤彦が郡視学時代(明四五・六く大三・三)に小学校を視察した際、細川という先生が写生的な作文指導をしていた。それをみた赤彦が飛び入りで模範授業をしたのである。当時、郡視学が飛び入り授業をすることは考えられないことではなかったろうか。そこがまた赤彦らしくもある。我が意を得たりとも思ったのではなからうか。大きな目をした得意げな赤彦の顔が浮かんできそうである。

飛び入りで行った島木の指導法は現代の目からすればこと新しいことでもないけれども、「水があふれ出るように頭の中から出てくるような作文を作らせなけりや作文にはなら」ないという考えは傾聴に値しよう。それは明らかに範文模倣を克服したものであり、自

己表現の作文という考え方につながってきているものである。

(島木赤彦の教育活動や教育観は思いのほか新鮮で現代的価値をもっているものであった。できるだけ赤彦自身のことばや赤彦と直接関係のあった人達のことばを引用し紹介しながら、教育者としての赤彦像を浮かびあがらせようとしてみた。本稿ではⅢとして「西尾実における島木赤彦の影響と島木赤彦観」に言及する予定であったが、島木による写生を導入した作文指導の歴史的意義の検討とあわせて、機会を改めて言及したい)。

(注および引用文献)

- (1) 本稿は、「国語教育論の展開——西尾実の国語教育論」(昭四九・三東京教育大学教育学部紀要第二〇巻)。「国語教育論の展開——西尾実の国語教育論(その2)——」(昭五四・三筑波大学教育学系論集第三巻)。「西尾実の作文教育論」(昭五四・二人文科教育研究VI)。「生活と文化の有機的統合——言語生活主義・言語活動主義の理念と成立過程——」(昭五四・五 国語教育研究 第八四集)に続くものである。
- (2) (六五)六七ページ)
- (3) 金原省吾は赤彦との出会いについて、「人の生涯の中で、少年期より青年期にうつる一五六才の年頃は、最も感激に富んだ時期である。この頃の友情や師弟の情は、生涯、自分の背にしみとはって居る様に思ふ。私が先生(島木赤彦)から教をうけたのは、丁度この時であった。随って私の生涯の傾向は、この時に定ったものと言ってよいのである」(『信濃教育』四七七号 大五・七・六 六三ページ)と語っている。



- (4) 『信州教育のために』信濃教育会昭四二・十一・一〇 二三四ページ
- (5) 「人間赤彦の思い出」(その一) 西尾実 『解釈』 昭五一・三・一 二五一集 六ページ
- (6) 『守屋喜七文集』信濃教育会 昭二六・七・三〇 四九ページ
- (7) 「久保田君を憶ふ」守屋喜七 『信濃教育』四七七号 六一五・七・六一四ページ
- (8) 「訓練綱要」(明四五・五「長野県諏訪郡玉川村小学校」)『赤彦全集』第七卷 昭四四・一一・二四 再版 岩波書店 六〇ページ
- (9) 「生徒経歴簿」(高等四学年 明三三・四)『赤彦全集』第九卷 昭四五・三・二四 岩波書店 三一七ページ

注(2)

島木赤彦 西尾実 略年譜

- (11) 「我校幣ヲ論ジテ同人諸士ニ訴フ」(明三二・一〇『小天地』第三号)『赤彦全集』第七卷 一四ページ〜一九ページ
- (12) 「職員会誌」(明治四四年度 四月二三日)『赤彦全集』第九卷 三六三ページ
- (13) 『島木赤彦の人間像』島木赤彦研究会編 昭五四・八・二七 笠間叢書二二八 二七ページ 三六ページ
- (14) 「授善会」(明四三・五・一六 長野県東筑摩郡広丘小学校授善会)『赤彦全集』第七卷 四九ページ〜五〇ページ
- (15) 『赤彦全集』第七卷 一八八ページ
- (16) 『信濃教育会雑誌』第二〇〇号 明三六・五・二五
- (17) 『赤彦全集』第九卷 三五九ページ
- (18) 『島木赤彦の人間像』「赤彦門下よりの聞き書き集」ここで引用したのは、細川隼人からの聞き書きである。三四六ページ〜三四七ページ

※ 引用の場合、漢字はすべて新字体に改めた。

(筑波大学教育学系講師)

	島木赤彦	西尾実	
長野県諏訪郡上諏訪村に生まれる	(12月・16日)	年令 明治 年令	<p style="text-align: center;">○「」は論文。</p> <p style="text-align: center;">○太字は両者が関係した事項を示す。</p>
古田学校小学校初等科入学	(4・)	1	
古田学校小学校初等科卒業	(3・)	6	
南大塩高等学校入学	(4・)	14	
南大塩高等学校卒業	(3・)	19	
諏訪高等学校第3学年に編入	(4・)	21	
諏訪高等学校卒業	(3・)	13	
諏訪郡泉野小学校の授業生(備教員)となる。	(10・)	15	
(この頃から、和歌・俳句を創作し投稿)	(3・)	23	
	(10・)	2	
	月 日	(5・14)	長野県下伊那郡豊村和合帯川に生まれる



